芭蕉句解　一　春夏

911.3
バ
春夏

序

誹諧の名は古今和歌集に出て我門に
古人かしこく賞翫しくはしく句中に作法を
残しぬ俳祖も世の為なり其後先翁
ことにありさなむかしの數枚の中にも高才十子
その外諸国に流行して西は筑紫松島まて
されとも蕉翁は桃青門人にて其角嵐雪は
とりどりと句作も深浅厚薄意味深長の秘事をしるして
この両子代々其ゝに流をひいて其流其ゝに
今翁の句とて人々稽古し侍るにたゝ花実

れ対待用曲節字眼玄妙乃法かし風流の本紙
弄ても未にたとし只た世人はいへる名作めしめつく
そのさは志ゝ次第も作る類多しとや今雪中庵
蓼太は先師風雅の正統吏登老樹ゝ高弟にて
別風雅は点印を譲られ夢ゝ乃本を示され
彼老樹ゝ両風を志らふて芽庵と号す和十と世に
こゝろる生その年月缘ひあるゝ好士ゝ正語よ新る
ふれ時に従ふてかゝ残たつ縁起は世そその脈まくい
行脚の路傍乃河る流を本鳥の音ゐ承ゝ梢の
志かし俳しく凡里の筆を継る本書乃山

家の梢乃出に哀れをそのはしむかし人良はの
そよ吹嵐やく蝶もみ代の路ふみる松風もゆくらく
富士の高嶺をしと凡里は縁して赦あり宗也なと
おもひとり又古き宮寺に詣ては寛平延喜の
むかし代きのひわろは仮寐の情まつ酒れ餘
女の唄ふなる歌あひて野ゆく里の草あらはも
かく中に想像し又古城砦の旅猶りて田畑乃
中に古墓苔むし古戦場乃跡なと見つは何なる
倡し捨人の身ならかく清まる御代の恵を
きをたまふとしかく此時くに直略せしに述ぶ

翁乃生涯ハ西行宗祇の跡をしたひ去は京
さうのは路みちのくに東海も花も憶ようち
まし地たるみ人のかやの宿やまでで時鳥に
聴えの歌ありし秋の月のかゝるゝは雲
れぬく人を休め雛乃いろくよ船の形し浦や
鵯鵜ら法文書もゆりたらん時しはし来世のえ
かいろよ紀行録あるし高き肩生け一ゑなる令へ
うつもれし名所もむかし此志のくかしこり
武家の子にけ辛苦をひまれくその郷よ入て
不うしこゝけ翁のおしえも一ふ乃きれかい本ハ

事ゆゑ書河川かくて蕉翁の句なんちゝうち
なりきくやきら一百句よ紀まりそのまゝ書
うけもれ毎しも句おなく又のむけ世乃好上ん
事なけしも句しんも志に字高して　かさく
気生乃れハ性にもしるよ　かき作者ゆる

楚水

芭蕉翁句解

青中庵蕉人右述

芭蕉よきことや伊勢乃初にて

桃青和尚の弟に此書はいせにある人書伝へ侍

りしを今梅子乃ひて世間よりおこれる此文字の常にも

人の元日と云ふ事を芭蕉と形容せられしも例の

風雅のまこと柳子極かち衆乃ふつゆひもむかしに付

世上の風匠よいせの初坂なるく鄙の一字も増へからず

一字も減すへからずして正しかるへし

年々や猿にきせたる猿の面

柿本に六窓一猴 猿の[illegible]人の似せ[illegible]
うつりゆくも生死無常乃[illegible]
きせて面[illegible]むかしむかし[illegible]乃前[illegible]
観想なり 慈恵大師七猿の和歌に
はかなくも浮世の中と思ふまじ[illegible]
見きても[illegible]叶はぬ[illegible]浮世の中にまじ[illegible]
法に[illegible]
何をも見れ[illegible]事[illegible]

[illegible]猿[illegible]
人は[illegible]猿[illegible]人の[illegible]
見[illegible]の猿[illegible]
或人云芭蕉翁生て　後光明院乃御宇正保元年甲申
伊[illegible]統理[illegible]一文許六[illegible]
文選直指の[illegible]祖翁[illegible]猿の面[illegible]
の[illegible]口受[illegible]
維[illegible]
大路長宗[illegible]松[illegible]氏[illegible]

衣冠優麗の姿よ男は今年も錦或書に伯者也
打と秋風吹くに声ある中は生して後成卿が縁た
称し鄙ぶの詞よ暫く八旬有余にして老身白髪なるの諸忠
帽子紫襟の袈裟を上に席浪を松下の叢よおいて嘯き
寄りて和哥はかきみせる仏に松風あらく声ば
かくんる夕霧とのみなりけり地下と下略共かくかりにしの
加ちはいりせり

雅人か蕭さくまに花のかげ

孫晨字元公家貧織蓆為業明詩書為京兆
功曹冬月無被有藁一束暮臥朝收

似合しや新年瓢垂れ体

深川芭蕉庵よ茶を作るの瓢なり根も苦く
ある深川門人馬又芭蕉を知るに宜に深窓の茅出称せし
瓢銘山素堂一瓢重黛山自笑称箕山莫慣
首陽餓這中飯顆山

元の如く川瓢を称さ我世の弥

芭蕉瓢の文へはり晴て今未載何某が家の孫

秋かり文武集にしよあれしや都速めかきに来
納年に川の都まふく一番律に申せられ旬
給ひけん

子良館の後は物きりしいへそ

御子良子は一もとゆかし梅の花

おりしも信言めしとはる子良子
太神宮の神饌を奉仕せる少女なるを
本しむる所紙子良の館といふ元て神木
梅の花は吟有りとそ

むかし若菜摘り子宮のさ桁け
此一集は山川大津ら東行の餞別なり梅若菜
丸子の宿乃旅立く旅くの風流さそふいとも
こりんし又あつけたる心の謎して駕昇女の
寂しきにあるさも紀羇旅乃一棒やなんし
此句ニ版切
口受

こんやくふかいは當川若菜

拾遺物の名に　此らん書

くゆまし若葉つむへく青つらい茂なりこうやくゆ
ゆへに蓖蒻の立入けく時に紐て若葉摘なと
なりされい蓖蒻乃初きめて風まてうなれ掛合され
れし南寺頭の粉骨称きへし

夢とく説り眠りな嬌也なり

荘子齊物論曰昔者荘周夢ニ為ル胡蝶ト翔々然胡蝶也此
こゝ頭に應一をな姫頭の柳乃眠まるかしく糸なれなる
白日にも老と昔の物誌の夢とい思ひ出す一きに能當と抄し
あい彼故事ふまへあをりに比られ来よ見るなれいの

荘子なるへし

たゝ柳をめてり柳はさりる志多へなり
此句許六か宇陀法師に　なれりのなさいる柳の立田
と書るを世々の短冊を書得せる諸集におせる所乃
柳のさりる志多へ所い謡わりと紀きを掛たるなさいる柳
といへる初の夢にしと　柳乃さいるに例の兩案の粉骨と
見えたり此句法玉連環体口受にして詩の連訓にしも此ふ
　おも蘂を知陽をすれし　東坡書禅集寄円静思伊久陽
帰期憶別離時聞漏轉これ連環の折とうけ給りぬ

大り枝やしきり捨し一庭

一休禅師叡山に住ひたまひし時流徒等大字紙
題これハ禅師坂本の里にけて紙に総せしの
字をきり捨て給ひしとそ

二月十七日神路山を出るとて

裸にはまた衣更着のあらしかな

此句ハ増賀の信をかなしむといへる詞書有り此上人ハ名利の
思ひ深く伊勢太神宮に祈請ありて名利を捨よとの

示現を蒙りたまひ小袖衣皆乞食に脱あたへて赤裸
にて下向したまひしと撰集抄に記されたり只捨かたき
名利なるをやまさに二月の嵐に其信をかなしめる芭翁の
御志又高し

二月堂に籠りて

水とりや氷の僧の沓の音

此句ハ籠ると書て奈良の都へ入て参詣ありて二月堂に
籠るといふ詞ありて此行法二月朔日より七日に
至る此日堂前の石井に若狭の遠敷大明神より送出

昔人齢をしめたまふ此浦なる別れに及て靈等此下す
これを二月堂の水取といふ也

高野
父母乃しきりに恋し雉子の声

良弁僧正の鎮まるにほろくと鳴山田の雉子の声
又これ何人母もあ拙筆を以て添まれる也

悼呂丸
当帰よりあはれは塚の菫草

呂丸は出羽国羽黒山の麓の人なり翁の羽黒に付て一夜
此後の京川に仮寝し其後華洛乃桃亡坊に年越て
夜更て旅中にして黄泉の客となりしといふ
当帰は唐の王建が詩に蘼蕪亦是王孫草 莫ニ送春香ヲ入ニ客衣ニ 蘼蕪一名当帰此二字当帰は遠く丈の旅に
あくがれ出ていふ国情の是乃詩也哀し当句の二字をも
摘とのなん又楚辞九歌曰 悲莫悲兮生別離 楽ハ
莫楽兮新相知 このんで物しさまで当帰乃あはれ
かなしきいかなれとは死別をまさりし又哀とことふ
意なるん菫艸は塚に続しき是はかせたれなるべし

老懶

蛎よりハ海苔をバ老の売もせで

山家集の雑の部に串にさしたる物を商ひけるを
何ぞと問ければ蛤を干て侍るなりといふを
おなじくハ蛎をぞさして干もすべき蛤よりハ名も
便ありけりとよめり此句ハ青海苔の売ハわれ浅ましき
翁のさかりの頃何ともなく老ぬれバ又此句この
前此一段をあハれて蛎よりハ海苔ハ法の前に建
あそなり

葛城山の麓を過る

猶みたし花に明行神の顔

昔役の行者岩橋を作らんとしける時葛城の神
此神ハ何とて葛城の神ハ見目悪しと世の人の言ふに
かくいひ伝へ給ひしを猶見たしといふ俳諧のおかし
さかんなりハ其山の麓にして役行者の優婆塞の在所也

何業院に花ある馬に鞍

花咲く頃ハひとり山里の使を待ちけるに鞍おけ

晩亭の詞を摘く阿蘭陀の流を表はしおのれは往ハ
死まゝあらく目出の威風は句中にあらはるへし

ちる花や鳥も驚く琴の塵

是ハ紫野の画賛なり 劉向別録曰 魯有善歌者虞
公發聲清哀拂動梁上塵 このことによりてかの梁上の
塵を落したるにたとへてたる桃源の主なる派を称せるへし

支考か法要へ手向ける

此ころ縁拂世に花あり熊一具

春雨や夏夕立に秋昇世の中よくて我も合せん
と縁の顆ひまして阿陀も食の施行に出戒の一句と
みるへし

よし注まて

山さくら見つくその名所

歌意ハいふかれ佛をあいられいはひを
深うとくいはす此見葺もの知らしゐる事なり
この句の者く能ふなりよまれ先ハ見付とハ一二考
花を意をまもりあるへし

布袋の賛

ものほしや袋のうちの月と花

烏丸光廣卿黄葉集布袋の讃に大宝ハ
さしたる物のなくて月雪花も秋乃物ならず句意よく
此句にかよひて无一物の禅味よりいふへし

かげろふや柴胡の原ハ薄くもり

柴胡の原地名と云ふ説ハ非也柴胡ハ薬草の名也
胡荽といふ和名にて只見るまゝを詠る景色の眼前体なり

湖水

行春を近江の人とおしみけり

義仲寺ハ奥幻住庵より来られし此吟ハ門人等と共に
勝れる湖水の眺望に遊び自然と情をのべたる吟なり
一句の情ハ近江の人といふ所に在りて尽ざる情にて
行春を惜むの情あるへし

行く春に和歌の浦にて追付たり

此句ハ根もあり古集に入る所ありて其ハ和歌にいつくしみ

この銘を将しよくし得和哥の浦に山色遠含空
海明先見日と瞻望すしとおは此の瑶蘿清くまと
膓もへきこの地なりされは此句れともちうつりて
浦山の風色よ見とり出せる示をなかりし

いせにて
神垣やおもひもかけす涅槃像

今葉集　神垣の内らとえくや夕まぐれ花のいも
けの祖乃まへくりんよかまひて無常
迅速の句情深し

和しきれむ月ハ楠乃莟哉

袖日記に云此句諸集に載られし也まれなり今
東條師の為[illegible]に遊ひ[illegible]此乃
気色をしてむつきの空[illegible]山家集に　所も
楠まれ花の楠に花のしるしも此[illegible]
とあり

ほとゝぎす啼や五尺のあやめ艸

躰云啼や五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もする哉

誠はよしの社の南の事は此集の頃は法乃誹合しく
みんの二字は此月の字しおり置は前は寒帷は西法
の行つきとなくし西国法師の頭とみ人のかつよ
也此誹さん事しに添へしといふ事なり

奥州武隈松にて

桜より松は二木を三月越シ

奥細道に曰 元禄二年弥生末七日武江を
立て 舟行ちしか 武隈の松に至て 桜より三月
越しその松は二木を立て 交季時分よし 此長途の昔也

桜より待かねしに 武隈の松は二木を詠人
いつも同じさまを吟む

まつくしや 菖蒲の種まいつゝん

菖蒲の吉もいつしか書きし此種はいつかしけ時候の
節句まつしは吉凶をもて調しては菓子之上臈も
きこしめさせしものよや 枕草紙にまつしとふれのとくの
御手紙さへ千年をも寿きける硯のふたに敷て
これをとゝ さてしよなつへ入して乃り参れは后宮寺
ちつと菖蒲やにいくつ日乙残仕とは君を恋ひつゝ

〳〵とりゆせたまへる

許六が本意路を述とき

旅人乃てう須もし以よ椎の記

万葉集よ　家にあれバけまりる飯を草枕旅にしあれバ

椎の葉にもる　馬季也　論もなせる撫麻か一の〳〵

風雅の細こをたとる之人を称するなり

竹譜曰

之てもしハ竹椎の貝ハ簑と笠

五雑俎曰栽竹無時雨過便移須留宿

土記取南枝此妙訣也俗説ニ五月十三日を竹酔

日とわふまきれハ俗説を理氏給く立春より付又

居家必用　五月十八日栽竹及十三日為竹本

命日栽之百無一死頻試實効竹へ入るよ若

笠の抓合ことくすゝしく秋風なり

古き世の志のひて

君のみち植まける大楠の木

此句ハ蔚統家しも元よて楽大楠よ植ゑ植ける

〽若葉の雨しも見え侍れと其の句と見る座し
古歌に　家のゆかり何となく家の和歌をよみける
かならず[?]しこ　又大楠は西国なり源氏の旗にも
たとへ楠の香は国方[?]殊に楠をもいはれて[?]
般若乃宮何[?]時[?]をみちに会人[?]書[?]なき[?]
ともに楠木に揺るのつけ合動くべし次

象潟西行法師

夕なぎや桜にまじる浪の花

此句桜を象潟のうち蚶満寺の入江を詠きて

何か家集に　象潟のさくらは波にうづもれて花の
うへこく蜑乃釣舟

夏　あつくるし昼顔何草の一つかな

一つ葉ハ草根塔にて或ハ岩壁石垣のあはひに生ずる漢名石葦
よりへる葉尊之句意ハ枝もなく枝にたゞ花なき物ハ花よ
たよる只一つ葉の無きを見せる俳諧の観想なるべし

此戸の涌[?]て

蟬乃頼[?]鳴[?]や[?]なり

此乃え(?)きにて有九(?)薬子の以は深くしてくは
御歌作(?)あれしみ紙(?)作との發此何(?)氣かくおもむき
世俗またれか有先歎のうちにありてゐかかるを
いかなる撰集抄西行の諸人發心の事云柳陰乃
令相しむるおもひと皆(?)筆する也此岩葉(?)につて
部しても歎く其蝶(?)は一物といひなをわれて四方の
成(?)をとして深く其紙(?)數しと五乃年も世となりて
する人をくもおろかなる也さてかくへし　下略　芭蕉
常に撰集抄の趣を考へい中にも見えてれし
其角の絵(?)をおもふへし

　　芦野にて
田一枚うゑて立さる柳かな
芦野ハ下野の国にあり　此所の人は清水流るゝ柳は
むかしよりそこに古き名(?)の跡(?)ありしといふ此柳乃
ある事ありてまつかしき植るひつれも田一枚植るあ
まいかに古きあたりの柳なる(?)感情く句法　模寫實然口授

　　にて
此所寺に鳴く蝉(?)　本多圃(?)

○芭蕉翁の好まれし素堂之介相語て付物等すゞ
先達の師の法事に入て佳何の日をと傳へおかり一巻を
何年に平氏の人々此經讀ひし時ちる物ありけり是を
按り見る要の風に芳野経乃声を出して読経をく
かの物有ぞ爾此一句をそ世子の事に当て是を見る有

枯芦も鶉も鳴乃こゑ川るか

体碍物作甚深の工夫木のめは此りめて　編
舎りりその体はからかうくこのいと面白くさき
りうハ記ろく　かく数き川く知れすつるし

何色いふ深くきぬる緒より見ぬものを縁の者は編乃
上に添ふをとして天ひよりも色笑をもる句中に
糸とゝ緒の一つなは冬菜と一しおそち染しける
事なるへし

山端宗徳印録して

何かと紙幣和尚かくまかりなる

宗徳ハもしや是於る須三郎　山端の竹林に隠くちん
かいまし世にある文相額もむ人の祖と成何の附
○近供敏下統山雲宗徳ゝかの川とい抄して世との

むかし行脚ありて　宗祇ハ深川にて俄ニつゝみて
見しさへひとしは　時むかしにたけ蔭にける宗祇の旨
かゝる落葉にまかせたりし　又宗祇ハ眠信清を離れ
まて隠遁せられし所なりハ撰集ハかの隠逸の
身なれ行はなし此志を寄せし其師との眠を
まのかよひて涙ひたすらに此句をもなしけるとなり
此句ハ隠逸の宗旨をもて志し風雅に世をわたれる人ハ
其見識もたらんかとてん

道出よ胴ちりて葉の雪

奥細道に翁此所にての吟なり　又其秋ハ表季
なれとも夜もすがら是ハ歳暮ともかぎれとひとく
雨花作なんとえつらう夢ハ雲にはく池に首に
物をかひやうになく嫌ふなきものかれ
こもやも　又康老　坂老ハ別の思なり

えけふ田とよ目も捲く穐

よく見まれ薪も垣根の垣

つ坊主つ…

菖や茅らしろ藪乃ふ

梅うへ古巣にら梅や咲く色

秋風の吹わたる乃山家かな

梅白しきのふや鶴を盗まれし

山里ハ万歳遅しむめ乃花

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

梅かゝにのつと日の出る山路かな

伊賀の国阿波乃庄新大佛にて

丈六に陽炎高しいし乃上

かけろふや柴胡乃原の薄くもり

何乃木の花とハしらす匂ひかな

蝶のとふはかり野中乃日影かな

起よ/\我友にせんぬる胡蝶

古池や蛙とひこむ水乃をと

高野にて

父母乃頻にこひし雉子の声

蛇くふと聞はおそろし雉子の声

伏見西岸寺任口上人に逢て

我衣にふしみの桃乃雫せよ

咲乱す桃乃中より初さくら

桜かりきとくや日々に五里六里

木のもとに汁も鱠もさくらかな

菜畑に花見顔なる雀かな

草菴

花の雲鐘は上野か浅草か

京清も花見乃中にて七ミ帰

芳野にて

花さかり山は日ころの朝ほらけ

二月の圓をおとゝ作りて
うくかゝふうしなおゝ海のなる
一里ふて礼ゐやまのゐ絲こや
子年徒とりんまて花かたし
丹波市とや いそころ山て
ほおきミつとな御年
宇都て席のるふころやふちの紀

一つ様ミうしろてあひぬ夜のえ
時雨雨紀く死をいそくのなし
須戸乃鷺然見え備や子規
駒と様子馬牽むすこ深くなす
本の色似く葉揺もゆめやゆくゝ路
一都乃江ミ揺くみや宿てとくふ花
太ふかて庵のまとうむ社見えて

此日におゐてをかしけれは

灌佛の日にうまれあふ鹿の子哉

其角か母五七日追善

卯の花も母なき宿そすさましき

うの花やくらき柳の及こし

武府を出て故郷に赴く川崎

まて人〳〵送り来て餞す

乃句をいふその返し

麦の穂をたよりにつかむ別れ

招提寺にて鑑真和尚の御影を

拝し法目の盲させ給ふを

といひつたへて

若葉して御目の雫ぬくはゝや

雲岸寺奥に佛頂和尚の山居の跡を

木啄も庵ハやふらす夏木立

石山の奥雲ふかきに入人乃幻住椎
末寺にあり幻住庵といふ清浄
翠微乃佳境いと目出度眺望なん
侍りし卯月の末より移り入る

先たのむ椎乃木もあり夏木立

此のてふ(?)にそへ給ふ乃すさひ
猶翁を生くる出合ん事の(?)

粽ゆふ片手にはさむ額髪

露沾公に申侍る

五月雨に鳰乃浮巣を見に行ん

大井川水出て島田塚本氏のもとにとまりて

さみたれ乃空吹おとせ大井川

眉掃を俤にして紅粉乃花

どんみりと樗や雨の花曇り

すゞしさやほの三か月乃羽黒山

素川已白亭に日ころありて
やどりせん藜の杖になる日まで
この境はひわたるほとゝいへるも
乃事にや
かたつぶり角ふりわけよ須磨あかし
花の上漕とよまれし桜乃老木
西行法師乃記念をのこす
夕晴や桜に涼む波の花

越田秋 笛見人
あつみ山や吹浦 鶴はぎ ぬれ
稲母の通ひゐぬか稲ゆるとて
松ちしろくてやゝて稲ふ苗紙
等窮といふものゝ許に白川の関いかにこ
えつるやと問
風流乃はじめやおくの田植うた

志のつ井里のち千鳥乃石とぬらく

干潟よ句ゐのかゝやむかし志の摺

鴫田塚本氏にて

直岳中く真綿かけしや茄子汁

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

立石古

閑さや岩にしみ入せみ乃声

無常迅速

やかて死ぬけしきは見えず蝉の声

さゝ波や風の薫の相拍子

雲のみねいくつ崩て月乃山

湖や暑さを惜しむ雲のみね

撫子のあつさ忘るゝ野菊かな

夕やみに亍瓢むいて遊ひけり
豆腐や米櫓とらむ夜の李
秋きの葉明夕やとらん縁のやせん
朝露やよしとてすし所の泥
柳とり片岸にあまし袖吉柔
あふこの身湯のなを守りて去来比
許へ旦佐りたし宗因

なまき人乃小袖も以ろ也や土用干し
六月や巌にやきよくあみしやまか
古袷のみしめの相持はつかしれ
思はれし荊に涼むしかな風
夜夜来風秋かりけくさ涼
所の浪むいて那の葉摺跡
夜さめ無しもの由あなれあと

五月雨をあつめて早し最上川

涼しさを我宿にしてねまるなり

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋

落柿舎にて

五月雨や色紙へぎたる壁乃跡

花の陰謡に似たる旅寝かな

西河にて

ほろほろと山吹ちるか滝乃音

画讃

ふるき和宗治乃情炉ひらき時

肉書雛人形天皇の比かとよ

山路来て何やらゆかしすみれ草

ひとつよもよき体に涼うれ